

園のおたより



第 10 号

令和 8 年 2 月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

童謡のふしぎ

園長 関 由起子

先日の「ともだち会」では、園内にこどもたちの元気な歌声が響き渡りました。最初は全員で『くつがなる』。続いて1組さんは『やぎさんゆうびん』に『こぶたぬきつねこ』。2組さんは『朝はどこから』を披露してくれました。この『朝はどこから』は、担任のA先生がこどもの頃、お父様が朝起こすときに歌ってくれていた曲だそうです。寝ぼけ眼のA先生とお父様の姿を想像すると、なんとも微笑ましく、温かい気持ちになりました。3組さんの『てをつなごう』では、一生懸命なこどもたちの姿と歌詞の意味が重なり、涙をこらえるのがやっとなりました。

次から次へと飛び出す歌を聴きながら、私は自分の子育て時代を思い出していました。娘がまだ幼児だった頃、私が食事の準備のために台所に立つと、決まって足元で「遊んで～！」の猛攻撃が始まりました。そんな時の救世主が“童謡DVD”でした。再生ボタンを押した瞬間、娘はテレビの前に釘付け！画面に合わせて必死に踊る姿を横目に、「よし、今だ！」と玉ねぎを切る私。あのダンスは、我が家の平和な食卓を守るための“平和の舞”でもあったのです。今思えば、必死ながらも愛おしいひとときでした。

さて、不思議なのはここからです。大人になり、園長となった今。あんなにカラオケで熱唱したはずの「昭和・平成のヒット曲」は、歌詞がうろ覚えでモニターがないと怪しいもの……。それなのに！数十年前に歌ったきりの『くつがなる』や、1組さんが歌った『やぎさんゆうびん』などは、伴奏が鳴ればスラスラと口から出てくるではありませんか。歌った回数は、絶対に歌謡曲の方が多はずなのに、です。これはもう、「日本人のDNAに、童謡のメロディが刻み込まれている」としか思えません。

明治、大正、昭和と歌い継がれてきた童謡たち。私たちににとっては懐かしい歌ですが、こどもたちにとっては、今日出会うピカピカの「最新ヒットソング」です。日本の自然や四季、優しい心が詰まった歌が、こどもたちの体の中にスッと溶け込んでいく様子は、見ていて本当に素敵です。きっと今のこどもたちも、何十年か経ったあと、ふとした瞬間にこれらの歌を完璧に口ずさみ、「あれ？なんで覚えてるんだ？」と不思議な気持ちになるのでしょう。

皆さんのご家庭では、いま、どんな「ヒット曲」が流れていますか？忙しい毎日ですが、たまにはお子さんと一緒に「DNAの記憶」を呼び起こして、童謡を大合唱してみるのも楽しいかもしれません。



「友達」とは何でしょうか（5月号・11月号の続き）

副園長 小谷 宜路

5月号、11月号と、2回のおたよりでも紹介したとおり、「『友達』とは何でしょうか」とのテーマで、今年度の本園での研究活動を進めてきました。年3回開催した「公開保育研究会」では、地域の園の先生方などに参加いただき、具体的な本園での日々のこどもたちの姿から、「友達」について共に考えを深めました。各回、教育学部の先生からの新たな視点も研究を整理していくヒントになりました。また、「友達」に関わる様々な書籍や論文に目を通したり、県内外へ研修、視察等にでかけたりする機会も積み重ねながら、1年をかけてじっくりと「友達とは何か」という問いにアプローチしてきました。

「友達＝○○」という明確な答えを出す形でのまとめではありませんが、1年間、紆余曲折、試行錯誤してきたプロセスを、まとめのリーフレットとして、現在、整理しているところです。年度の前半に記録したこどもたちの様子を、改めて読み返して、年度後半のこどもたち同士の関係性と重ね合わせてみると、また別の見え方も浮かび上がってきます。今回の研究では、幼児期の「友達」について考えてきましたが、もう少し長期的に、例えば、この幼児期の「友達」を5年年後、10年後、30年後、50年後に振り返ってみたときには、今とはまた別の意味が捉えられるかも知れません。

幼児期に出会い、つながった「友達」は、その後、長く「友達」であり続ける場合もあれば、ある時期から疎遠になっていく場合もあるかと思いません。成長していく過程で、長い時間を実際に共にする「友達」もいれば、ほんの短い時間を共にする「友達」という場合もあるでしょう。「友達」としての物理的な距離の遠近と、心の距離の遠近もさまざまな場合があるでしょう。それでも、その時々大切にした「友達」とのつながり方が、幾重にも紡がれながら、一人一人のその人らしさ（孤立した一人ではなく、人と人との関係の中にある一人として）に結実するようになっていきます。

今年度、「友達とは何か」を研究テーマにしたことで、幼児期の「友達」に留まらず、人と人との関係の在り方を意識したり、言語化したりすることができました。一個人としても、これまでどのように様々な人とつながってきたか、今どのようにつながっているか、これからどのようにつながってきたいのかといった、私自身の在り方を見つめ直す1年になりました。丁寧さをもって、誠実さをもって、人と人との関係を紡いでいくことを大切にする、そのような気持ちでこれからの毎日にも向かっていきたいと思っています。





1くみ

「ああ面白い！」

チューリップの背が伸びたと嬉しそうに周りの人に知らせた人がありました。「誰に」話したいというよりは、みんなに知らせたい思いがあったようです。それは「自分の声を聴いてくれる人がいる」という安心した関係が築けているからだと思います。4月には全く知らない人同士で同じ部屋に集っていた22人の友達が、互いに毎日を紡いできたことで、一人一人のよさに気付いたり、一緒に笑ったり、同じ遊びでつながったり、時にはけんかをしたりしたすべてのことが今になっていると思い、嬉しくなりました。こどもたちは今この瞬間をよく感じて、あまり先を見て不安になりすぎることもなく、過去に思いを向けすぎることもないような感じがします。今を十分に感じて面白かったり、心地よさを選んだりすることが、次の瞬間を創り、やがては明日になっていくのだろうと感じます。ある本に「大人になった後は、子ども時代を取り戻して本来の自分に戻っていくことがいちばん大切です。いったん大人になってから、あらゆる場面で最も必要とされるのが子ども時代の感覚なんです」とありました。まさにこのような姿なのではないかと思うのです。

さて、ともだち会では、おうちの方が見てくれたとても嬉しい会となったようです。少しの緊張と高ぶりにも出合ったようでした。桃太郎のお話ごっこのこと。みんなと一緒に読んだ紙芝居には、犬の次に雉がやって来て、最後に猿がやって来る場面がありました。また別な絵本では犬、猿、雉の順でした。いろいろ違うことを感じることもきっかけの一つとなりました。雉は卵から産まれるから、パリッと割れたように作ったほうがよいこと、鬼は岩から産まれるから鬼が島はゴツゴツとした黒っぽい茶色っぽい色にしたほうがよいこと、美味しいものを食べて大きくなっていく中で、大好きなものを食べて大きくなっていくようにしたいこと…それぞれがお話を膨らませていき、面白くなりました。会の後には、もっと面白くなるように、お話を変えてみたいことを具体的に話してくれました。そう言えば、以前に鳥取県に出かけた時に、大きな鬼の像がそびえ立っていました。どうやら、桃太郎ご一行から逃れて来たのだそう。もう悪さはしないし、みんなを守るからここに住ませてほしいと言ったのだそうです。いろいろな説があると思いますが、こどもたちは、それぞれの役らしさを味わってお話の世界に入り込んでいる素敵な世界を創ったと思います。



2くみ

「毎日がスペシャル」



先日はともだち会にご参加いただきありがとうございました。プログラムにもありましたが、こどもたちの表現はただそこにあるだけで素晴らしいものですが、それを見てもらい、受け止めてもらい、さらに素敵なものになっていきます。ともだち会当日はそんなスペシャルな一日でした。

さて大きな行事の日だけでなく、園で過ごす一日一日その全てが、こどもたちにとってスペシャルになりえます。お正月に紹介した糸引きこまの楽しさが継続している人たちが、コマを転がすコースを作り始めました。段ボールの枠やガムテープを使いながら、上り坂や下り坂を作っていました。コースを使って実際にコマを転がしてみたときに、上り坂をコマが駆け上っていく様子は、まるでコマが意思をもっているかのようでした。それを見たコースを作っている人たちは顔を見合わせて喜びました。次第にコースはコマが冒険する壮大な物語になっていきました。コースは分かれ道になっていて、まっすぐ進むと「悪魔コース」トンネルや障害物がたくさんあります。左に曲がると「天使コース」ダイナミックな下り坂があり、最後には鈴の入ったカゴに入って音を鳴らします。コマが意思をもったように上り坂を駆け上ったその瞬間から一気に面白さやイメージが広がり、遊びを進めていく姿がありました。

今月初めのまだ寒さが厳しかった時期、草花と水を一緒に凍らせたいと考える人がいました。いろいろ相談するうちに、寒い場所を見つけておいておけば凍るのではないかと試してみることにしました。次の日、見に行ってみると水は凍っていませんでした。「今日は暖かいから」と休日を挟みながら次の登園日に見てみましました。すると、氷は朝日を美しく反射させ、草花がそこに彩りを添えていました。それをみたこどもたちは「うわぁ」と声が思わずでしてしまう様子でした。思っていた氷以上の美しさがそこにはあったようです。

一瞬一瞬の中で起きる様々なこどもたちの心の動きが、園で過ごす毎日をスペシャルにしています。そんな日々を一緒に過ごせること、感謝しています。



3くみ



「豊かな世界」

ともだち会ではこどもたちの表現を温かく見守ってくださりありがとうございました。お家の人が見に来ることを指折り数えながら楽しみにしていました。

昨年末のこども会で1、2組に見せたいことの1つの案としてドラマが挙がり「ともだち会までに準備をして見せよう」とはりきっていました。そのため、3組では「劇」ではなく「ドラマ」と呼び、3学期になりすぐに制作を始めました。まずは、どんなドラマにしたいかそれぞれのやりたいことを出しました。「ドラマはオープニングから始まるんだよ」の一言で歌と楽器をオープニングで披露してからドラマを行うことになりました。その後も、「大きなテレビの中に映るんだよ」「ダンスとかもしたいよね」などドラマの中に入りきれないくらいやりたいことが出てきました。

大まかなあらすじが出来上がり、実際にみんなで動いて演じてみました。探検隊、博士、雲の妖精、動物など出てくる役をいろいろ試す中で、自分のやりたい役やその役に合う動きや声を見つけていきます。演じる中で、「宝石を投げたら大きな扉になる」など新しいアイデアも出てきました。その都度、みんなでお話を作り変えながら繰り返し演じました。制作を進める中で“もっと面白くしたい”という気持ちが生まれてくると、作ることで頭の中にあるイメージを表し始めました。宝石の扉や動物の耳、しっぽ、洋服、双眼鏡、虫眼鏡、宝石など…。一つずつ形になっていくことで、お話の世界観やその役らしさがより加わり、こどもたちの気持ちも高まっていきました。当日になると、たくさんの方がいることに緊張する様子もありましたが、それよりもようやく見せられることを楽しみにしていました。終わった後には「どきどきしたけど楽しかった」とやりきった達成感でいっぱいの様子でした。

当日のドラマの中では使えなかった大きなテレビは保育室の窓辺にかけておきました。ともだち会の全ての演目を終えると、「テレビに僕たちの生放送映ってたかな？先生、見てた？」とつぶやく声が聞こえました。その声に他の人もはっと気づいたようにテレビを確認したり、やりとりを耳を傾けたりしていました。テレビに映ったところを見た人は見つからなかったのですが、「今度はテレビに映るように生放送しようよ」とそのことが次の楽しみになっていました。お話の世界を通して自分と友達の世界、そして日々の生活が自然とつながっていたのだと思いました。

演じるだけでなく、作る、言葉にするなど、それぞれの表し方でドラマ作りに関わり、みんなで一つのもので作り上げる面白さを感じることができました。残りの生活の中でも、こどもたちの頭の中に広がる豊かな世界を一緒に面白がりながら過ごしていきたいと思います。